

震災は我が魂に及び

酒井恵三

(一)

二〇二四年一月一日の令和の能登地震では、私自身は大した被災はしなかった。しかし、物理的な損害はあまり無くても、この震災は私の精神に強烈なダメージを与えたのだった。恐らく震災が我が魂に色々な影響を及ぼした中でも、その最大のものは、私の世界観に及ぼしたそれではないだろうか。そんな気がする。

私がこの文章を書いている今の時点でも、実は震災に関する事柄を頭の中ではあまり整理出来ていない。だから或る程度は長い時間をかけないと、しっかりとしたエッセイは書けないのではないかと思う。故に、二、三回程度に分けて書かなければならないとも思う。

あの日の夕方、私は自宅にてテレビを観ていた。突然、テレビと自分のスマホから緊急地震速報が流れたと思うと、強烈な揺れが襲って来たのだった。私はふと、平成の能登地震の時の事を思ったが、そのエネルギー、破壊力はそれを優に上回っている事は直ぐ分かった。実際地震が来ると、何もする事が出来ない。大きな揺れである程、理性的な判断能力も働かないし、学校時代に教わった様な地震への対応などあまり役に立たない事も良く分かった。今はただ、この揺れが一秒でも早く収まって欲しい、そう願うばかりだった。

二分ほどに思えた能登地震の揺れで、リビングに飾られていたエケコ人形と言う、メキシコの魔除の人形が落ちて来て壊れた。私の家で目立った被害と言えばその程度だったが、能登地震はトラウマと言うか、それから度も重なる余震の都度あの本震の時間を思い出す様になっていた。――

(二)

元旦の本震の後もしばらく余震が続いたが、私は自分の精神が少しづつ削られていく様な、これまでに無い恐怖心を味わっていた。四日が仕事始めの日だったが、それまでは一歩も外出さえしなかった。本当は震災が無ければ、映画の一本も観に行きたいと思っていたが、それどころでは無くなっていたし、熊本地震の様に、数日内に再度大きな本震が来るのではないかと言う思いが、心を捕らえて離さなくなってもいた。

職場の年末年始の休みどころでは無かった。半ば放心状態の中で、朝起きるとそのまま

テレビをつけて観続けている自分がいた。お正月の特別番組はかなり吹っ飛び、結構な部分が発震地震のニュースに割かれていた訳だが、それを時間の許す限り観続け、自分の置かれた立場を理解しようとした。表立った被害が我が家に無かったとは言え、自分の足元近くまで崖が崩れ、その先にいた人々が巻き込まれるのを見る様な、嫌な感覚がどうしても蘇って来るが、テレビのニュースは観ずにはいられなかった。

本震から数日もすると、自宅の給湯器（エコキュート）の調子がどんどんおかしくなり、とうとう壊れてしまった。真冬に自宅のお風呂に入れなくなり、銭湯等に頼らなければならぬのは、辛い事であったが、そうとばかりも言っていられない――。

仕事始めの日に職場に出掛けて行くと、壁の至る所にひび割れがあり、その下に粉を吹いた様に小さな破片が落ちていた。少なくとも私の自宅ではあまり見られなかった光景だけに、結構気が滅入った。しかしそうも言っただけでもいられないので、他の人達と一緒に片付けの作業に取りかかった。

私はいつしか、旧約聖書の「ヨブ記」の話を思い起こしていた。地震に津波と、神は何故にこんなに我々に対して試練をお与えになるのかと言う気持ちになった。「ヨブ記」の主人公ヨブは誰よりも神を信仰した義人だったが、神は敢えて彼に対して過酷な試練を与える。私は、神（自然）と言うのはこの「ヨブ記」に描かれているように、実はかなり意地悪なものではないかと、思う様になって来ていた。かつては恐竜等、地球上で繁栄を極めていた生物を滅した訳だし、少なくとも人間や動物を浄化するのに、手段を選ばないのではないか。或る意味ナチスやボル・ポト派にも通ずるものだとも考える様になっていった。

恐らく神は人間界の事を我々が考える以上に熟知していて、それでこのような過酷な試練――自然災害を起こしている。そう考えると辻褃が合うのではないか。私は特定の宗教を信仰している訳でも、或いは極端な無神論者でもない。しかし、聖書、特に旧約聖書は好きで良く読んでいた。かつてユダヤ人が歩んだ苦難の歴史の事を思うと、今石川県民が置かれている立場も何となく分かる様な気がした。

自宅の給湯器（エコキュート）が修理工事によって直り、何とか家のお風呂に入る事が出来る様になってから私の日常生活も昨年までのそれに、軌道修正出来たように思っていた。しかし職場での震災対応はまだまだ続いており、片付けもまだ完全には終わってはい

ない。そうした中で震災直後にはまだ現れていなかった状況に、面食らう事が多くなっていった。

例えば春を迎えた頃からか、金沢市内の道路がかなり傷んで来ている事が良く分かる様になって来た。度重なる余震活動、そして車の通行量の激しさで、大通りとされる道路は車やバスに乗っていると、ガタガタと揺れるのが分かる。香林坊では道に穴が出来ていたり、小立野通りや寺町通りを乗り物に乗って走ると、小刻みに揺れているのが分かった。私は普段はバスに乗って通勤している。仕事で疲れた時等、帰りのバスに乗っていると、心地良い揺れで眠気を催す事が良くあったが、もうそんな事も無くなっていた。こうした日常生活での様々な変化、これが能登震災が我が魂に及ぼしたものだと言って差しつかえないのだろう。三年以上にも渡って続いたコロナ禍が終わったと思った矢先、新たな災難に見舞われる事になったが、我々は自然の恐ろしい面にもっと目を向けなければならぬのかも知れない。私は若し神（自然）がユダヤ教やキリスト教、或いはイスラム教が説くように人格神で、自らの御意思で様々な業わざを成しているとしたら、一つ聞いてみたいと思う事がある。「次から次へと自然災害を起こされていますが、我々人類が一体何をしたいと言うのですか」と。